

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720023
 研究課題名（和文）江戸時代上方歌舞伎文化圏を対象とした演奏者に関する実証的研究
 研究課題名（英文）A positive study of musicians centered the kulturkreis of Kamigata Kabuki during the Edo period
 研究代表者
 武内 恵美子（TAKENOUCHI Emiko）
 秋田大学・教育文化学部・准教授
 研究者番号：30400518

研究成果の概要：

本研究課題は江戸時代に上方歌舞伎興行とその影響下にある地域の歌舞伎上演の場で活躍した演奏者の組織ならびに個人の動向、演奏者社会の変遷を解明することを目的であった。そのために各地での芝居興行の実態把握のため、芝居番付残存状況を調査・収集し、その動向が解明できるか、できるとしたらどのような形態が存在するのか等についてを探究した。その結果、地方の番付残存状況は想像以上に悪く、従来の方法では解明できないことが判明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	180,000	3,580,000

研究分野：音楽学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：演奏者、歌舞伎、上方、江戸時代、興行

1. 研究開始当初の背景

演奏者の実態解明は、非常に手間がかかり、困難であるため、あまり手が付けられない分野であった。江戸歌舞伎に関しては、これまで根岸正海氏が三味線音楽の楽譜に相当する正本の表紙に記載された人物名から、江戸の演奏者を整理、研究した「江戸歌舞伎演奏者年表一享保から延享まで（三）一」（『研究紀要』国立音楽大学、2003）「江戸歌舞伎における義太夫節」（『音楽研究』国立音楽大学大学院研究年報、

2007）他がまとまった先行研究としては唯一のものと言えるだろう。しかしこれはまだ整理の域を出ておらず、特に上方との交流が盛んになる近世後期に関しては、ほとんど研究されていないのが状況である。一方、上方歌舞伎の演奏者に関する研究は、本研究代表者が歌舞伎役割番付を主要資料として行ってきた。特に大坂・京都・名古屋の資料を中心に調査し、音楽学的、歌舞伎研究の双方の見地から研究を行ってきた。しかし地方の実態はまだほとんど未調

査の状態であり、どのような状況にあるのかは不明であった。

2. 研究の目的

歌舞伎は音楽劇であり、その上演に音楽は必要不可欠である。そして、歌舞伎に付随する音楽の歴史は、演奏者の歴史でもある。歌舞伎音楽では、基本的に演奏者と作曲家は分業しておらず、演奏者が台本・場面・役者の注文等に即した形で作曲し、それを演奏することによって具現化していた。したがって楽曲、音楽の傾向、歴史などの研究に際し、演奏者の動向、組織の有無やその形態や変遷などを考慮しないということは、歌舞伎音楽研究にとって致命的欠陥であると考えられる。

一方歌舞伎側からみても、役者の演技、戯曲の質が歌舞伎の出来に関係することは明白である。しかし、もう一つの要素として、演奏者によって演奏される音楽もまたその興行の出来を左右することを忘れてはならない。そのように考えれば、歌舞伎研究としても演奏者の視点は外せないはずである。しかし演奏者の実態解明は非常に手間がかかり、困難であるため、あまり手が付けられない分野であった。背景記載の通り、最近になって根岸正海氏や本研究代表者によって演奏者の研究はようやく行われるようになってきたところであり、歌舞伎研究の他の項目に比べて遅れていると言わざるを得ない。歌舞伎に出演した演奏者に関して、個人的動向、組織の有無、その形態や運営システム、歴史の変遷等、多角的に分析することによって、演奏者の組織された社会の解明を目指すのが本研究の最終目標であった。それが行えるだけの資料が地方にまだ残存しているかという点から調査を始めた。

3. 研究の方法

(1) 音楽学としての演奏者研究

本研究は、基本的には音楽学の立場で研究を進めた。歌舞伎の演奏者研究は、上記の通り研究成果は多くはないが、音楽学の分野では、演奏者研究は、海外においてはヴァルター・ザルメン著、上尾信也訳『「音楽家」の誕生——中世から現代までの音楽の社会史——』[Walter Salmen: Studien zur Sozialgeschichte der Musiker und des Musizierens] (洋泉社、1994) に代表される、「楽師研究」が行われてきており、日本でも上尾信也『楽師論序説——中世後期のヨーロッパにおける職業音楽家の社会的地位——』(国際基督教大学比較文化研究会、1996) などが行われている。その方法論は、金銭出納帳や法政資料、日記や記録、伝承など、様々な記述資料を分析して行う音楽社会史的見地からのものである。この方法論を近世日本の歌舞伎という枠に導入して楽師研

究を行うというのが本研究代表者の研究の一つの方向性である。この成果に基づき、2007 (平成 19 年) に日本音楽学会第 58 回全国大会において、西洋音楽側からは中世担当の上尾信也氏、近現代担当の大崎滋生氏、日本音楽側は近世担当の本研究代表者、近代担当の塚原康子氏の 4 名による「演奏者 (楽師) の社会史」というシンポジウムを企画、実行することによって、日本古典音楽における演奏者研究が、西洋音楽で発展した楽師論として通用するのかを学会に問う機会を設けた。(本研究代表者は企画、パネリスト、コーディネーターを兼任)

(2) データベースと統計処理での演奏者研究の実施

ただし本研究代表者は、この従来の音楽学的見地すなわち文献資料による方法論に留まらず、データベースを構築し、それによる統計分析、ネットワーク分析、統計分析などを行うことによって社会分析を試みるという、この分野では独創的な方法論を用いている。これが本研究のもう一つの基本となる基本方針であった。この方法論では、以下のように作業を進める形をとった。

① 資料の収集

まずは、対象とする上方文化圏と考えられている、あるいは定説となっている地域について、歌舞伎興行の有無の確認と、その際歌舞伎番付が発行されたか否か、また発行されたとしたら残存がどの程度あるのかについて調査した。

具体的には、まずは、地方の歌舞伎興行については、県史あるいは市史等にその概要が示されていることが多いので、それを調査することから開始した。また薄田純一郎『宮島歌舞伎年代記』(国書刊行会、1975) や吉田映二編『伊勢歌舞伎年代記』(放下房書屋、1933) に代表されるような、その地域の番付を集め情報化した書籍が数種類存在するので、他の地域にこの種の書籍が刊行されていないか調査を行い、刊行されている場合には、極力購入し、絶版のため購入不可能だった書籍に関しては、複写を行った。

残存している番付調査は、基本的にはコレクションとしてまとまった点数を所蔵している図書館・資料館・博物館・公文書館等々の調査を行い、目録を発行している場合には基礎資料として収集、さらに所蔵資料の複写、あるいは複写が不可の場合は現物の撮影を行った。

また一方で、対象となる県あるいは市の文化財関係部署あるいは県史・市史編纂等々に問い合わせを行い、当該地域での江戸期の歌舞伎番付の残存状態を調査確認した。ある程度の所蔵があると回答があった地域につい

ては所蔵先までを調査し、所蔵先に連絡、閲覧ならびに複写、複写が不可の場合には撮影を行った。

対象とした地域は、北九州、山陽、四国、近畿、中部、北陸、東北日本海側の各地域である。ただし、この地域すべての都市を対象とすることは、3年では不可能だったので、各地域から代表都市を選出、その都市を中心に調査を行った。具体的には、北九州からは大分、山陽からは広島、四国からは香川、近畿からは大阪府下、兵庫、和歌山、中部からは伊勢、名古屋周辺、北陸からは金沢、東北では秋田の各都市である。

② 収集資料のデータベース化

続いて、複写あるいは撮影した収集資料のデータベース化を行った。具体的には

- ・ 複写資料を画像データとして取り込み保存した。
- ・ 記載情報を入力し、データベースを作成した。
- ・ データベースを取り込んだ画像とともにファイル化し、出力したものと複写資料を保管した。

データベース化は、基本的には各図書館、文庫等から収集した残存している原本からの複写あるいは撮影のデータを入力し、書籍としてまとめられているものについては、時間と労力の都合上、今回は採録しなかった。

③ 分析方法

データベースを構築した上で、先に研究代表者が作成していた上方歌舞伎番付データベースと比較することで、地域の特性、上方の中心地である大坂との関係性を明らかにすることを試みる方法をとった。具体的には次の通りの分析を行う予定であった。

- ・ 演奏者個人の動向解明：演奏者個人がどのような形で歌舞伎と関わり演奏を行うのか、出現が多い演奏者を対象にその動向を調査・分析すること。
- ・ 演奏者の組織構造解明：一定数以上出現している演奏者を対象として、それらの人物が誰とどのような関係を有しどのような劇場に出演しているのかを調査すること。この調査を重ねることによってその時代のその場所にどのような演奏者の組織が存在したのか、何が演奏者組織形成の要因となっているのか、その組織は他の組織とどのような関係性にあるのか、どのような歴史を辿ることになるのか等、演奏者の組織形態について分析する。
- ・ 演奏者組織の行動形態：演奏者の組織構造分析において解明した演奏者組織が、当該地域でどのような活動を行っているか、それが歴史的にどのように変化していくのか等を解明すること。またその組

織が当該地域に複数存在するのか、複数あるとすれば、その違いは何か等、組織の形態について分析解明する。

- ・ 演奏者と音楽との関係性：演奏者組織の行動形態の分析考察に基づき、一定の演奏者または組織が一定の演目を行う傾向があるか、現存している音曲の作品傾向が演奏者組織の動向と関係性があるか、演奏者組織の違いに音楽的な差違を見出すことができるか等々、演奏者から歌舞伎音楽の変遷に基づく音楽的な動向を考察し、演奏者と音楽の相関関係の有無を解明すること。

4. 研究成果

① 年度別の結果

18年度は上方近郊、かつ上方歌舞伎の直接的な興行地として考えられる地域、すなわち名古屋・伊勢を中心とした東海地域、和歌山・尼崎・神戸・兵庫などの大坂周辺地域ならびに兵庫周辺地域を対象とした。

当該年度の調査に基づく研究は、上方歌舞伎の中心地域との距離が比較的近く、上方歌舞伎の劇団も多数公演に訪れたと考えられるが、特徴は以下の通りであった。第一に、歌舞伎番付を大量に保持している国立国会図書館・早稲田大学演劇博物館・大坂府立中之島図書館・実践女子大附属図書館・阪急学園池田文庫・関西大学附属図書館における調査では、当該地域の資料に関しても一定数の所蔵が確認されたが、量的にはかなり少数であった。第二に、当該地域の公立図書館・博物館・資料館等の所蔵状況は、名古屋周辺を除けばかなり劣悪であり、現地での番付残存はほぼ皆無に近い状況であった。したがって、この地域の一都市のみを対象として、データベースから統計的分析を行うのは不可能に近い状態であることが判明した。

19年度は山陽・北陸・東北地域を対象とした。具体的には広島、金沢、秋田である。この地域は18年度に対象とした地域よりもさらに資料状況が良くないことが判明した。ただし、広島と金沢については、前掲の『宮島歌舞伎年代記』（広島）の他、副田松園『金沢の歌舞伎』（近八書房、1933）の2冊の書籍を入手できた。これらには比較的多くの番付が採録されており、他の地域よりは比較的残存状況が良かったが、それでも書籍を除けば残存状況は18年度対象地域以上に厳しい状況であった。したがって、19年度対象地域についても、個別に分析を行うのは不可能であった。

20年度は九州、四国地域を対象とした。具体的には大分、香川である。香川は特に金比羅宮に現存する芝居小屋があることから番付残存が期待されたが、実際には江戸期のものと確定できる当該地域の歌舞伎番付は30

点に満たず、ほとんど残されていないに等しい状態であった。またこの地域には、刊行された番付集も存在せず、個別に分析を行うのは不可能という結果であった。

②まとめ

以上のことから、申請時に予定していた各種の統計的分析手法は、現状ではどの地方都市についても行えない状態であることが判明した。ただし、書籍として刊行されたものが存在する地域については、書籍掲載分を含めれば統計分析を行うことができる可能性もまだ残されている。しかしそれは、伊勢、広島、金沢の三地域に限定されている。(名古屋は評判記も出版されるほど江戸・上方に次いで歌舞伎興行が盛んな地域であったため、除く。) 今後さらに調査すれば番付が見つかるのかは不明であり、この種の実証研究の難しさを痛感する結果となってしまった。

しかし、多少なりとも各都市における歌舞伎興行の番付が残されているということは、全く番付が発行されなかったということではない。したがって、まだ発見される可能性は残されているとも言える。ただし、一地域ではなく、日本の広い範囲で何故このような状況になるのか、その理由を地域の他の資料の残存状況も視野に入れながら考えることもまた必要であろう。

今回対象とした都市の周辺の地域も含めてもう少し広い範囲で調査をすれば、地域によっては統計分析を行うことができる可能性も残されている。また、書籍として刊行された地域は、その中でも比較的資料の残存が良かった地域である。この地域が江戸期の拠点になっていた可能性も考えられるのではないだろうか。それが推測できるように状況が明らかにになっただけでも、この種の実証的研究としては成果があったと言えるだろう。

さらに、今回は上方歌舞伎文化圏と考えられている地域を対象としたが、江戸歌舞伎との関係性がまったくない訳ではないことも判明した。今後は、上方歌舞伎と江戸歌舞伎の勢力範囲がどのように成立していたのかについても検討していく必要があると考えられる。また、これらの地方都市に関しては、番付以外の資料も用いることで実態を解明するべきであると考えられる。

本課題としては3年で終了であるが、研究テーマとしては継続するものである。本課題の成果として各地の番付データベースが作成できたので、本研究で判明した事象を元に、各地域の拠点地域を定め、少々範囲を広く取ることによって当該地域の分析を試みたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 武内恵美子「近世大坂の説経讃語芝居における演奏者」『日本研究』37巻、91-123、2008、査読有
- ② 武内恵美子、山田奨治「統計解析を用いた歌舞伎演奏者の活動傾向に関する研究 (1) —近世上方歌舞伎の場合—」『情報処理学会研究報告』9号、73-80、2007、査読有

〔学会発表〕(計4件)

- ① 武内恵美子「『歌舞伎囃子方の楽師論的研究』のコンセプト—上方大芝居の囃子方の動向を中心に—」於日本伝統音楽研究センター研究会、京都市立芸術大学、2007年11月3日
- ② 武内恵美子「江戸時代の音楽について—上方歌舞伎と演奏者研究を例として—」於秋田大学史学会、秋田大学、2007年10月20日
- ③ 武内恵美子・上尾信也・大崎滋生・塚原康子「演奏家(楽師)の社会史(シンポジウム)」於日本音楽学会全国大会、宮城学院女子大学、2007年9月29日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武内 恵美子 (TAKENOUCHI Emiko)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：30400518

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：